は今口 あ年今 の年

の私では

ありま 丁

ません。多分今年の正月の東年ののである。

月もあ

年の正月



推月 一 卷一十章

□それでも多くの子供達は丸で昨年の正月でも來たやうに、己に十日も前から、正月だ正月と云つて、此の正月を待つたものです。一家も朝から、正月だ正月と云つて、此の正月を待つたものです。一家も前から、正月だ正月と云って、此の正月を待つたものです。一家も前から、正月だ正月と云って、此の正月を答って、身もいる全く更新した氣にも満される。子供時代の正月ほど本常に樂しいものはない。
□然に今日の私にはそれが皆過ぎ去つた正月であります。正月が來たぞと云ふのではないが、昨日の大晦と今日の元日とがそれほど私には變つたとも思へない。
□性に生きてゐるものでもなければ日に新た、日々に新たと如來を如めてはないが、昨日の大晦と今日の元日とがそれほど私には變つたと思へない。
□中心として變つて行くかのやうに思へるのです。從つて、昨今のまゝが今日の私とも思へない。
□中中に自即めた舌々、何か今年こそやらうではありませんか。幸に如來るのを待つやうで決して結構な事ではありませんか。幸に如來を変したるなく、無事だ無事だで暮すのも、一生葬式の來るのを待つやうで決して結構な事ではありませんか。幸に如來を正月唯全に重醒めた吾々、何か今年こそやらうではありませんか。幸に如來の□願くは全國同志俱に供に立たれんことを願います。(念)

來

春來る 垣を越へて 正月を迎へて 尅 念阿

宗教と生活 土屋觀道 子

宗教 と 人生 (三) 土屋観道逃 土屋観道 土屋観道

眞生同盟支部通信

吾朋便り 境遇の相違(二) 道友に告ぐ

革命するどころか、宗 落ぐり込んで行つて、 流に押し流されて、少 を其宗閣から嫌はれ せん、寧ろ成るだけ其 は喜ばれまれて T 寧ろ成るだけ其宗派色を濃厚にじて振舞はねば受けが悪いれませう。而しその「宗派色」から一歩も外へ出る事が出来になつて、御用説教をしてゐたら、そりや御信者やいお寺が宗派の布教師になつて、何々宗派の教線を擴張するためには から嫌はれぬよう 宗派に拘束されず、一者は、常に宗派より に心懸けて 寧ろ宗派を引擦つて行く一歩高き處に出てゐる者 つて行 رزر と濁だまら其

何百人の人、が死んで行つてゐるかわかりません。又一方では何十人、何百人かの赤ちやんが、 しい生命の波が、 、と産れて來て居ります。此の私達が何も知らず寢てゐる闇の夜にも、 温い布團に埋つて、 波うつてゐるのです。 何も知らずに一既グツスリ寢込んでゐる內にも、 天地の間には斯くも素晴ら 一方では何十人の オギヤ

だのです。 起きたのです、そして此の「生命の濤」に搖られつゝ、又永遠に活きて行かうとしてゐるのです。 ものでもありません。私と云ふ「私」が、��自然から生かされ、 私といふ「私」が、 此の「生命の濤」に搖られつゝ、私達も眠つてゐたのです、そして此の「生命の濤」に搖られつゝ今 單獨に此の大自然から切り離されて生きて居れるものでもなく、又活きて行ける 大自然を活かして行く可き「私」であつ

何でもありません、 錢を私有した時、私自身の死であるばかりでなく又彼等の死であり、大自然への生命冒瀆であります。らぬように、又彼等にも其の使命を遂行さしてやらねばなりません。私が妻を私有し、女中を私有し、今 女中にも、生命の神秘、重大なる使命が與へられてゐるのです。私自身が、 「私」が此大自然より、生命の神秘、重大なる使命を賦へられてゐるように、一本の大根、一錢の錢一人 私だけが、救はれてゐるー それを思ふと「私」だけが、『活かされてゐるし 寧ろ社會的に惡であります ーなんと自己陶醉してゐては濟まん譯です。 -救はれてゐる』と、 獣んで居れません。 そんな個人的享樂が宗教でも 此の重大なる實務を果さんな 金

時代は過ぎて社會人は等しく不安動搖の中に確乎たる生活の指導原理としての社會性宗敎を探求し 自分の手足に觸れるものは、假令一絲半錢たりとも無駄にしては勿體ない、 るのです。 自己活き他活き、共々に、自覺が全般に擴がつて行きたい。最早や、個人の宗教、家庭の宗教の 一分一秒時たりとも活用

たとへ古き宗教が、舊き場所に無くならうとしてゐても、新しき宗教が新し たゞ新しき時代は、 新しい人々によりて造られる。 (尅子) い處に芽生へつゝあ

ろ

宗教と生活

土 屋 觀 道

、佛教以前の宗教

のであります。 考へたのがそれまでの宗教でありました。いはゞ人は神の爲めに造られ、 配して、一切を命合するものであつたから、私共は一切を神に献けて神の使命に立つ可きものであると き置位にあつて、一切の人類を支配したものであります。 主さして、 言かへれば神が人間の上に君臨して其の威を逞しくした時代でありました。 へられたのであります。 佛教と佛教以前の宗教とを比べると佛教以前の宗教は全く人が神の支配下にあつたのであります。 人が神の配下にあつて、神の命之從ふと言ふ有樣で、 而して之はまた多くの場合、 一國の專政君主に對すると同じ形の上に在つた 否、それごころか神は私共を創り、 神は恰も當時の專政君主と全く等し 神の爲めの人間であると考 從つてそれまでの宗教は 私共を支

未開人の宗教やユデア教、キリスト教、マホメツト教等の稍進んだ宗教と云ふ中にも、 之は釋尊以前の一般宗教に就て神の思想を比較すればよく判るこころでありますが、 若くは君臣の關係に能く似たものでありました。 人と神との關 その他多く

一釋尊の宗教

係にまでなつて來たのであります。 したる人間の生活が神を排して人間を中心とするの生活にまでなつたと言てよいのであります。 せられて人類の自覺が自ら神の生活にまで立つやうになつたのでありました。言かへれば神を中心と 然に釋尊の宗敎は一切の之等の支配神や創造神を排斥して、 佛陀と衆生との關係は君臣の關係や、 獨立自尊の生活に立つたものであります。 主徒の開係ではなくして、自己の本源、 自ら宇宙最勝の置位に立つ、 而も之は從來の神の觀念が悉く打破 若しくは親子の關 從つ

身を持てる一凡夫が自ら佛陀の自覺に昇り、 絶無の宗教と言つてよいのであります。 充分にまで完成せられたと云つてよいのであります。否、完成ごころか釋尊の思想信仰は從來のバラ モン思想やジャイナ思想に一大展開を試みて、 我一體の思想として非常な展開を以つてゐたことは事實であります。然し、今や釋尊によつて、 それが 尤も斯うした考へは必ずしも釋尊にのみよつて始つたものでなく、 其の教理は四諦十二因緣の說と古來言はれて居りますが、 萬人等しく、解脫涅槃の妙境に入るとの教へは全く古今にれて居りますが、それを徹底することによつて、此の肉 佛教獨特の教理さへあみ出されて來たので あ りまし 一面印度宗教の哲學的考へは梵

革命と云ふことが許されるならば之ほご大なる革命とては世に有りません。 いのであります。 此の意味に於て、凡そ人類の生活に自ら神(佛)たるの生活を宣言したるものは佛教を於て他に無 之ぞまた人類生活の一大自覺の展開であると云つてよいのであります。 凡そ宗教に

生活に譲つて此の世から消えうせたと云つてよいのであります。 兎に角、佛教に至つて從來の神々はその蔭をひそめ、今や天地支配の創造の神は一切の置位を人間の兎に角、佛教に至つて從來の神々はその蔭をひそめ、今や天地支配の創造の神は一切の置位を人間の 之は此の世に於ける所謂專政君主の

崩壊さその轍を一にせるものと云つてよいのです。

三、浄土教の展開

賤にある。 於て、 己の生活に内省し來るとき、人類の生活は未だ一切を佛陀とするには甚 のです。 b 追ふものでありました。佛陀の自覺、何こ云ふ壯嚴の自覺でありませう。 て來たのであります。凡聖一如生活運動と云つてもよければ、佛凡一體の誓箋更求と云つこうに、此の理想はやがてそれへの實踐となり、諸佛諸菩薩の活動となつて、一般凡夫の生活の上にも現は 佛教の教へは常に理論より實踐を重んじ、 人類の理想は無限であります。 而も此の理論の實踐こそは眞實の佛敎が常に現實を忘れない所以であります。此 而して真實の理想は單なる人生の理論にあらずして、 而もその理論の實踐は自ら佛陀たるの理想の實現を だ遠いものがありました。而 而も此の自覺を以つて の意味に 自

佛陀となれる(欣求淨土)とは寧ろ此の上もない人類思想の一大展開であります。 理想はありますまい。此の世に一切の望みを失つた(厭離穢土)人類がそのまゝ人類最高の理想たたのが浄土教の思想信仰であります。「今は凡夫だが之でも佛になれる」との望みほど凡夫として高 而も此の運動が諸佛の心より動いたものが阿彌陀佛の本願であり、凡夫往生の願心となつて 現は

四、第三淨土宗教

之は佛陀の肉身成佛があまりに壯嚴に過ぎて、普通の人類には遠く及ばぬと誤まつたからであります。 つて今後の佛教は再び釋尊の眞説に歸つて、 然、それにしても従來の淨土敎はあまりにも現實を無視して、未來の淨土のみを願い過ぎました。 如來を中心とする現實からの宗教と せ ねば なりませ

ん。之を現代の言葉に譯すれば聖淨二門の止揚生活であります。

想として、少しづゝでも此の世からそれを實現して行く宗敎が本當の宗敎でなければなりません。 未來のみを觀念した觀があります。けれごも、今後の佛敎は宇宙の眞相に體達した、釋尊の生活を理 やうとしたのでありました。 りません。それは恰も月が未だ滿月では無いけれごも、月相分の光を放つて輝くやうに、 と思ふのでありますが、今までの聖道門はあまりにも自力を主張し、徒に佛陀の生活を觀念上に成就し 未だ成佛の域に至らずとも、 此の意味に於て、 此の事は少しく歴史の進展を静思して、 今後の佛教は少くこも此の世から釋尊を中心こする理想實現の宗教でなくてはな そしてまた、今までの浄土教はあまりにも他力をのみ主張して、 それ相應の向上の生活はなくてはならぬのであります。 來るべき人類の宗教生活を望め來れ ば自ら明かとなる事だ 私共の生活

九宗 敎 即 生 活

大特長であつたのでありました。 るの宗教へであります。 從つてそこには人間が自ら神となり、 られてゐた でありました。 一體の教でありますから、人が神となるの教へであり、神と人とが一體であるとの教へであります。 今少し之を具體的に言ふならば佛教以外の從來の宗教は神人別格の宗教であり、又神人別 又神ご人が一體になることもできなかつたのであります。然に佛敎の敎は神人同格であり のであります。 從つて、 而も人が神となり、 人が神となることを許さず、人は常に神の下にあつて、 だからいかに神と人とが近づいたか らと て、人が神となることは許され 神の生活を營むことを許すの敎へであり、神と人とが一體とな 神としての生活を人の上に現はすと云のが所謂佛敎の最 神より以下に支配せ 神人

然に其の後多くの佛教は此の理想を現實と離れて他方土に淨土を見たり、 或は現實の以外に佛陀の

生活であります。 すべてを生きやうとするのが理想であります。それが即ち生活に即した宗教でありまた宗教に即した ります。だから、私共も此の理想を實現すべく宇宙の大生命に一つさなつて、そこから今日の生活の 佛教でありますが、多くの吾々には色々の社會的事狀に障えられて、それが思ふやうに行かぬのであ は常に釋尊のみならず、いかなる人にも等しく此の自覺に到達して、此の生活に入りうるのが本來の 宇宙の大生命に融合して、宇宙生命そのものとして、此の土に君臨せられたのであります。 中に、此の世の眞相を如實に達觀せられたのでありました。言かへれば釋尊は正しく此の土に於て、 あります。乍然それは未だ釋尊の佛教を本當に知らない凡夫の見方であつて、釋尊の生活は此の世 境地を觀念しゃうとした為めに、折角の佛教がともすれば現實の世界と全く別離しやうとしたので 從て此の事 ō

その我れなるものが永久に個在するものの如くに考へる す。ところがその我と云ふものを此の心身そのま」を我 くせがあります。乍然、それは此の世の實際を本當に知 と思ふて、それが永久に常住するものと考へたり、或は 元來、人は皆我れと云ふものに執着するものでありま

らないから來る一つの迷いであつて、

(一九三一、一三、一九)

化して行くのが此の世の實相であつて、之として常住個 それは一切が常に相關し乍ら、時間空間に渡つて常に變 云ふやうな獨写主宰なものはないと云ふのであります。 在なものはないと見るのが釋尊の数であるからでありま 現象界には一として常住なものもなく、 又一として我と

姿も老いて、やつれた見るかけもない相となり、 見やうとすることはその最も誤りの悲しいものでありま 行くものであるのであります。だから自分を社會の一 められては白骨となる自分をも知らなければならぬので か死にたえて、やがては燒かれて灰となり、そのまく埋 いつまでも元氣で許り居るものではない。若かつた昔の れ行く老の姿をも見ることを忘れてはなりません。人は かり思つてゐると大きな間違いであつて、いつしかさび す。乍然それだからと云つて何時までも美しいものとば を見るのはよいのでありますが、たゞ自分を一個の我と はたゞ因緣因果の關係によつて、變化極りなく發展して うに此の世を考へてゐるのは大きな誤りであつて、 それを私共が何でもオレガオレガで自分一人の天下のや て滅するもので、常に變化して止まぬものであります。 して個在的に實在として見ることは大きな誤りでありま 從つて一切の事象は皆因緣によつて生じ、 世には此の身を美しいものとして見る見方もありま 國家の一員として、社會と共に、國家と關係して之 殊に此の肉身そのまゝの自分を永久不變の我として いつし

その老いたるを氣つくとき、いかばかり自分の前途に失 いつまでも美人だとばかり褒められた人たちが自分で

> あります。 る人の生活を私共は心から同情せずにはゐられないので れを知らずして、若い間をそれにのみ浮身をやつしてる の前途ほど衷はれなものはありません。ましてや、 望を來すことでありませう。 それを思ふと世に所謂美人

りますまい。 そんな事を思ふと、此の肉身ほど前途あはれなものはあ 散つた櫻が雨のあとに地に踏まれたやうなものです。 は一日もそのまゝにおくことは御兎と來ます、恰も嵐に はもうお仕まいでせう、息の根が止つたが最後、 からは鼻汁、口からはヨダレが出ると云ふやうになつて 盛りとばかりは云へぬのであります。目からは目汁、鼻 「花は盛りをのみ見るものかは」で、人もいつまでも 夏など

な人もある。美を慕ふ心としては少々の化装も悪くはな 高いとか底いとか、そんなことのみで大さわぎする。 いが、それよりも大事な人生の眞意義を忘れてゐるとは そのあとの川のやうになつてゐるのも知らずにゐるやう て、恰も自分が白くでもなつたかと合點し、汗の流れて れが果して人生で あ ら う か。中にはお白いを塗りたし とか、或は好きとか嫌とか色が黑いとか白いとか、鼻が て、未だ眞實の人生を悟らず、たゞ單に美しいとか醜い それを多くの人達は只目先きのことのみに心をやつし

しない、真の生活を辿つて行く事でなくては な り ま せ でなく、現に今、かうした生活の中に あ つ て 永劫に滅 で えいの輝きが大切であります。所謂人格の輝きが相 生に、心の輝きが大切であります。所謂人格の輝きが相 きさした生活を辿り、さうした生活とは死んだ後の生活の生活で り ま す。即ち眞實の生活とは死んだ後の生活の生活で り ま す。即ち眞實の生活とは死んだ後の生活の生活で りま す。即ち眞實の生活とは死んだ後の生活の生活でります。即ち眞實の生活とは死んだ後の生活の生活でります。所謂人格の輝きが相 た。そこには早晩の破滅がひそむ。從つてそこ 何事でせう。そこには早晩の破滅がひそむ。従つてそこ 何事でせう。そこには早晩の破滅がひそむ。従つてそこ 何事でせう。そこには早晩の破滅がひそむ。従つてそこ

ね。そこに本當の人生があるのであります。 真實の生活に此の自己を生かし活かして行か ね ば な ら 世から、如來の慈光に此の身と心との一切をまかせて、 性から、如來の慈光に此の身と心との一切をまかせて、 此の人生を眞面目に考へたことのない人々の考へであり な ら ところかの如く考へたのは未だ本

第七 向上の生活

ともないと良くなりたいと云ふ叫びがある。としないと良くなりたいとない、心の上にもよくなりの心とは肉の上にも死にたくない、心の上にもよくなりの心とは肉の上にも死にたくない、心の上にもよくなりの心とは肉の上にも死にたくない、心の上にもよくなりの心とは肉の上にも死にたくない、心の上にもよくなりの心であります。而して此の眞に活くべき人生の意義を深く研究し來るとき始めて私共はそくべき人生の意義を深く研究し來るとき始めて私共はそくべき人生の意義を深く研究し來るとき始めて私共はそくべき人生の意さを感ずる。人生の眞の幸福も始本心を本めてそこに人間の尊さを感ずる。人生の眞の幸福も始本心を本めてそこに自覺せられて來るのであります。而して出た。向上とないと良くなりたいと云ふ叫びがある。

連井」であります。心の眼に佛を見つ、佛と共に行く時はでありたいとの願ひともなるのであります。而も此の心に任せにて、日日の生活が良くなる事實を已れの心に體に任せにて、日日の生活が良くなる事實を已れの心に體に任せにて、日日の生活が良くなる事實を已れの心に體に任せにて、日日の生活が良くなる事實を已れの心に體に任めにて、日日の生活が良くなる事實を已れの心に體中に佛と共に生き行くものがあるならば「生死の中に佛と共に生き行くものがあるならば「生死共ま」がした。此の死にたくない、良くなり度した。此の死にたくない、良くなり度の道徳に於ても、此の死にたくない、良くなり度

個くだけでは何んにもならぬ。 いは人として同情すべきことではあるがコンナ類は實 ふ心は人として同情すべきことではあるがコンナ類は實 ふ心は人として同情すべきことではあるがコンナ類は實 かいは人として同情すべきことではあるがれたないないとは限らぬ。子供が板壁などへ落書 をしたり、率納の石柱までに自分の姓名や商票などを彫をしたり、率納の石柱までに自分の姓名や商票などを彫ましたり、率納の石柱までに自分の姓名や商票などを彫るしたり、率納の石柱までに自分の姓名や商票などを彫ましたり、率納の石柱までに自分の姓名や商票などを彫まるが如きは名譽を残すないと云ふでムヤミに民庭氣の至りである。 けれども今でもソン な馬鹿なマ しの質値もないように、人も只働けばよいと云ふでムヤミに はんは人として同情すべきことではあるがコンナ類は實

私共は價値的生活といふのであります。
しまって、その最も有意義に生活することをす。而も其の一日の生活の中に、眞に生き涯のある行動す。而も其の一日の生活の中に、眞に生き涯のある行動は實に生き涯ある生活で有らねばならぬ。そして吾々はは實に生き涯ある生活で有らねばならぬ。そして吾々は世の中は食べて行きさへすればよいと云ふ人もあるが世の中は食べて行きさへすればよいと云ふ人もあるが

第八永生の意義

て日々に新たに精進する人々を佛位に住する人と云ひま之は永遠不滅の生命的行動である。此の精神に立脚し

果はたゞ放火して死刑に處せられたといふだ けで その には人のせぬ様な大きなこと をするに限ると考へてギ かりです。昔希臘に愚かな青年が有つて名を後世に殘す 誠のないもの爲ることは、 た。よく世の中に死んで名を殘す とい ふことがあるが 然し其れも亦無理からぬ事で あります。彼の華嚴の瀧 そ死んだがまゝジャと云ふ考へをも起すものである。 へ飛びこんで死んだ、藤村操もャハリ其の類ひで あつ らふと 考 へに 沈む場合の如き、その結果がイツモ、 生活はないのであります。自分が毎日働いては居るもの 自分の行く先きが判らずに死んで行く くらい、 不安な あるが、行く先きがわからず闇の中には入るような、 し みに 滿 つた人生はない。世の中に絕窒と云ふことが 自己が凡てに良くなつて行く生活を體驗する程、 味のないことはありません。之に反して永久に死ない ことをいつまでもやらねばならぬと云ふ人生ほど人生に 世の心を以て努力する、そこに人生の意義かあります。 生死は已に問題でない。そして此肉身の終る迄向上と永 凡そ何事にせよ仕事をするに良いとも悪いとも判らぬ それが思ふ程の所得もなく、行く先ドー ナル で あ ヤの 町に放火したと云ふ話がある。然してその結 何とかして名を後世にまで殘したいと云 死ねば後は灰か土になるば 眞に樂

方であります。 達しし玉ふが故に畏るゝものなき事を説法せらるゝを示 施無畏の印とて智相を示され、 見える御相は來迎相と云ふ、右手を上に擧けて在ますは て在ますものである。又立像にて左足を少し前へ出して つて大宇宙の質相妙理を獅子吼して止まない大活動體に せられたものであります。故に佛は現に多くの人達に向 品上生の御相と云つて正覺成就して現在說法の眞意を表 像木像で兩手を結んでジーツとして居らるゝがアレは上 様はソンナ不活働な方で はな く實に前にも云ひました 居る者と思はれるに至つたのであります。乍然本當の佛 て居るのがエライ者かと思ひ、それが轉じて、佛様の尊 ように眞の活動の上に向上し而も永遠に活き活きとした ひと云ふことも、 た。だから多くの人達も何もせずにジーツとして威張つ 自分に氣に喰はぬとスグに殺すぞと言つた様なものでし 來の教が封建制度の下にョギナクせられて來たからであ 思つて居るが、 りませう。從つて昔の殿様は働らかずにイバツて居て、 やうにチツトモ す。然し普通の人達は佛と云へば佛間に安置された佛 印であります。抜苦の義と云つて其御智を以て一切衆 それは間違つた思想で有ります。 彼の何處にでも御祭りしてある佛様は畫 動かないジーツとしてをるものかの様に 佛とは働らかずにジーツとして樂して 佛は天地の萬象に悉く通 之は從

方の醫師は反つて抵抗療法をせねばならぬと云はれた。 人の説明は只人としての説明で有つて佛の如く完全と云 佛を見たてまつが顯現し給ふのであります。 即ち平常の時、煩惱の爲めに心が迷はされたる中にも、 應じて來現し玉ふ云ふとがあるのは其證據であります 行く時ばかりにあると思ふのは間違ひであります。經文 御姿である。その救ひとは人の煩惱の心の中に自づと佛 その中で一方の醫師は絕對安靜にして居れと云はれ、 た人が有つて多くの醫師を招いて診察をして貰はれた、 れに付てこんな話がある。ある處に一年餘りも病んで居 ふ譯には行かない。醫師のことでも又其通りである。**之** いことであるから神秘的靈感とも云はれてある。 とは今日の科學の力を以てば何等説明することの 心水に如來の影が宿り玉ふを宗教的に信仰と云ふ、此こ らんと願して、 にも「衆生心に佛を見奉らんと欲願ずれば佛はその念に け心が顯はれて來ることである。それ故來迎とは死んで ります。即ち來迎の相は人の迷へる心を救つて行かる」 て如何なるもをも救はねばをかむと云ふ御慈悲の印てあ 與えて衆生を救濟し在ます相である。 生の苦しみ惱みを拔き除き玉ふ力を示され 左手を垂れて見えるのは與樂とて積極的に慈悲を 念佛するときは此の煩惱の心の中にも佛 即ち四拾八願を以 たものであ 此の煩惱の 單なる

決(死)した方がよいと、苦しさの餘りは死ぬこと迄も考 ナことのみして居ては子供の學資に差支へが生ずる、 又ャッパリ又安靜の方が良かつたかと心が變つて床の中 へ出す。 へは入つてしまう。ソンナことを何度もくり返してコ なると體が絕へられなくなつてへたばつて來る。すると 移りて無ヤミに運動をヤリカラカス、之れも長き月日と 心が變つて一方の醫師が絕對抵抗と云はれたのは無理で 月の日時が立つて來るとモー嫌やに成つてくる。そこで 温計ばかり計つて居てサー度何昇つた何度降つたと體溫 のこと計りを氣にして、 而もこの二人の醫師はみな博士ばかりである。そこで病 は絕對安靜と聞ひても寢床の中に計り居てジー ٤ 今度は前の安靜療法を止めて新たに抵抗療法に 苦しんで居るところがそれが長 ツと體 自 ン

張り死ぬまで死なゝい方がよいのであらうか。 死んだが最後その時はナント云つて間に合はない、 びくと云ふと る。結局死ぬのもヘンダとなる。其れでも病んで居て永 も死に切れぬ場合に生き恥 を か ♪ ねばならぬと心配す 處がイヨノ 癒つて見るとア、死なゝんだ方が良かつたとなるも 其あけ句ャケクソ起して死んで終ふ人もあるのだ **へとなると首ツリも格構が悪ひ、腹を切る** - 層死んだがましだと脳が無茶汚茶にな

> も又それを信仰の生活とも云ふのであります。 御佛の命のまゝにャツて行くことを如來の使命を果すと 已上は一切を只如來樣の御心のまゝにヤツテ行く。その 全く任せて終ふことである。そして身心共に佛に任せた モー一度詞を更へて云ふと佛の救ひの中へ此の身と心と ふと阿彌陀佛の上へ衆生が南無と乗り込んだ相である。 が一ツに成つた處が南無阿彌陀佛である。詞を更へて云 そのまゝが南無阿彌陀佛である。卽ち吾々と阿彌陀佛と の命を阿彌陀佛に任かせることである。其の任かする姿 よ助け玉へと御佛に歸命することである。歸命とは自分 なる。此合掌の相を念佛と云ふ。即ち念佛とは心から御親 る。それだから吾々 はそ れ と判れば合掌せざる得なく の大御親にて在ます。そして吾々は皆御佛の子なのであ 御佛は宇宙大生命の上に立ち玉ふ御方なるが故に一

人のふり見て我ふり直せ。 議論より實行(念)

Ó

他人の惡口言ふ暇に自分の生活を反省せよ。(念)

仕事仕乍らの念佛ではない。

念佛の中からの仕事である。 念

道友に告ぐ

土屋觀道

御體申上ます。 内には色々と御厚意に任かりまして、御芳志のほど厚く内には色々と御厚意に任かりまして、御芳志のほど厚く

皆樣の御蔭であります。 皆無事で私も本年から傳道本位になり得ました事は全くら、私なども其の一人であります。乍然これでも一家が, 地間の不景氣で皆樣の中にも御困りの方も ありま せ

い。できるだけ御心に添いたいと思います。御考へがありましたら、どうか御遠慮なく御知らせ下さを御願い申します。猶傳道上にもかうしたならばと言ふ就てはどうか今後とも一層前にもまして、御盡力の程

年こそはお互に一層馬力をかけやうではありませんか。へも参上いたしますから御都合の程を御示し下さい。今の一路であるからではありますが、如來を中心とせる向上集りであるからではありますが、如來を中心とせる向上

境遇の相違か

土 屋 觀 道

ふ。」「その點は全く同感だ、お互に妻あれ、ないではない。 年然今日のやうな社會生活でいるは云はれぬが、今のこころそれほどいるは云はれぬが、今のこころそれほどいるは云はないのか。」「全くなれるが、今の心の安ま る ぎこ ろもないかさ 思えの心の安ま る ぎこ ろもないか が、「こんな不量氣では全くやりきれぬが、「こんな不量氣では全く同感だ、お互に妻ある。」「その點は全く同感だ、お互に妻ある。」「その點は全く同感だ、お互に妻ある。」「その點は全く同感だ、お互に妻ある。」「その點は全く同感だ、お互に妻ある。」

兩者が立ち行く間はよいが、今日の社會 状態はそれが全く相反してゐるのだから 状態はそれが全く相反してゐるのだから にいずだよ。」「仲々君は經濟問題にも詳 いはずだよ。」「仲々君は經濟問題にも詳 いにすだな、今時の宗教家はそんなこ こまで知つてゐるのか』知つてゐる處ろ か、それをごうするかさ云ふのが本當の か、それをごうするかさ云ふのが本當の が僧侶さ云ふものはそれた反つて害して か僧侶さ云ふものはそれを反って害して なだものではないか」。否僕なごの考へで ゐたものではないか」。否僕なごの考へで ゐたものではないか」。否僕なごの考へで

教ではないかミさへ思てつゐる。」教ではないかミさへ思てつゐるのが今日の宗の思想や運動を妨けてゐるのが今日の宗は今も尙それらの問題を閑却し、それら

衆にはまだまだ多くの阿片だかられ。 消滅だよ。」「ごうだか知れぬ、多くの民 多くの既成宗教などは僕の考へでは自然 てゐる。古い宗教、所謂君の云ふ今日の 々に對する宗教宣傳の方が大切ださ思つ りも、目下の急務はそれ以外の多くの人 のこころ、そんな既成宗教の改造運動よ だ。」「その意味に於て僕は現代宗教の一 乍然少くさも今日の多くの宗教の事實は 大革命を願つてゐるものゝ一人だ」、「今 僕なども そのこ さについては君さ同感 先づそんなものだなあさ、思つてゐた。」 思ふのか。」「本當の意味に於て、宗教が そんなものかどうかまでは僕は判らい。 教そのものが果してそんなものだこ君は 職に思つてゐたのだ。」 「それにしても宗 そんな仲間に入つて行つたかか僕は不思 思つてゐた。だが、君ほどの人が何故に こさになるれ。」「質のさころ、先づさう 教ではないかささへ思てつゐる。」 「するミ僕等もその仲間の一人だこ云ふ いやそれも亦無理からわこさだ。實際

不平等に又不公平に行はれてゐるかで云 ならのこさなのだ。そしてそれがい は人が人さして生きて行く上に考へれば でなくパン以上の人生か」もごより、 それのみでない、それ以上の人生が欲し 僕自身の生活には、一層それが大切なん ンのやりごり即ち、生産や、 ンのこさも考へればならね。 いのだ」。「イル以上さはパンのみの人生 だ」、君の心もよく判る。乍然、僕の人生は ない。僕にはそれよりも今日の生活 数のみは別物だ、でも僕にはそれが判ら 會的にも、 うするかで云ふここが、 のが晋々だ。」「さうか、それなら君の宗 く同感だ、だからそれな本紙でやつてゐ 醒ます宗教を聞いてくれ。」一それは、全 教さ云ふではないか、 飲めたものではない。人を醒ますのが佛 もあるやうだが、毒き知つたら阿片など の利益などで言つてゐるタワケた宗教家 に既成の宗教によつてゐる。中には阿片 衆は阿片さ知らずして、 人類の幸福の上にも非常に重 國家的にも重大だ。少くさも 今少々本當に人た 個人的にも、社 一時の苦難凌き 分配のここ 否、そのパ かに かご 26

> なんだ宗教の話も、そこに解決を持ちた 族が目下の急務さしてパンの生活が大切 れは人生ご云ふよりも、僕自身が僕の家 く樂に生活がしたいのだ。日常の生活そ がない。理窟は大概でよいから、今少し 多いやうだ、僕等はそこまで考へる餘地 いさ思ふのだ」 生存の意義もあるのだ。」「大へん議論が 破して行くさころに本當の人生があり、 がある。而もそれらの苦難を根本から打 してもそれ以上に、尙色々の苦しい人生 るのだ。又從てパンの問題が充分に解決 して正すのだ。従つ てパン が人生でな こさでなく、之を正すのは人生の一部と なくて、之等の不正が人さして爲すべき 乍然、それは單なるパンの爲めの運動で 上にも最も考へればならめこさである。 くするかを云ふこさは、今日の社會生活 大なこさだ。そして、それ 人生の爲めにこそパンのこさも考へ かいかに正し

り境遇の相違か。 は生活さ人生の意義を考へた之も**やつ**れ かくて彼はパンさ生活のここを考へ私

支 通

□東京眞生同盟會通信

ひたいと思ひます。 て活動いたすべく一九三二年の門出に響 信仰に醉つてゐるだけではいけない。大 本年から各地に傳道に出ていたゞくそう 立ち上らればならぬ時です。土屋先生も いに信仰を深めるこ共に、會員總動員し 行く……。かくて我民族の行手は……。 而も道は枯れ、義は亡んで、人々は目覺 うなるか、日本は、世界はごうなるか、 我々は大きな問題に直面して立つて居り 昭和六年は了りました。かくて第七年、 我々道をきゝ、真生に覺めたるものゝ 深刻なる不景氣ミ日支事變の嵐の中に たゞ生活に追はれ追はれて落ちて すべては行詰つて居る。 我々もだめ先生の思想に共鳴し 我々はご

告いたし全國同志の御協力を得たいご思 化しつ、あります。その素描をこくに報 動方法についての議を重れて段々こ具體 勃々さして起り、 東京支部においても、眞生運動の氣運 度々會合して組織及運

> 業基金の募集、其他の會計をい ます。財務部では、本會維持費及共濟事 會員の募集等の方法に研究を重れて居り 病氣その他に對する慰問、事業資金運用 になつてゐます。社會部では職業紹介事 居ります。今の處は同志の家を廻り持ち ります。研究部では、會員の火災、死去、 其他の事業を行ふべく、 業、無料健康相談、無料病氣診療の紹介 **ほ定日講演及座談會の計畫も進められて** 章様方にて道友座談會を開いて居り、尚 所の纁壽院にて念佛三昧曾、夜は佐藤益 生宅にて禮拜儀の講話、毎月十日晝は本 のは先づ敦學部では、毎月四日、土屋先 たゞいて居ります。その事業の主なるも それと、適任者分増してそれに當つてい 研究部、財務部、の四分によつて成立し 東京支部の組織は、敦學部、社會部

展して行くなれば無上の喜びです すが先づ手近より着々で進められ益々發 其他爲すべき事の甚だ多いのでありま

相談いたして居

人宅に於て 年末の忙しい中にもからわらず熱心な 去る十二月廿日午後五時より 東京眞生會總會報告

土屋上

致し、婦人會員のお手づからなる御馳走 杯の盛會でありました、越後より原さ も出來一同樂しく御夕食な戴きました。 んのお見えもあり、會員一同でお念佛を 會員は定刻前より續々集まられ會場は一 一、第一年度の事業報告

組織の結成及各専門部事業の報告 がありました。 都築氏說明 承認

支出ノ部帳簿名簿會報ノ代 收入の部 財務部報告 計 寄附金 維持會費 **藤田氏說明** 四六、三三 三七、八〇 八圓五三 承認

三圓三九

議事

差引金

四二圓九四

1 可決

全國眞生同盟組織結成促進の件

を作成するこさになりました。 が全國同盟決成準備委員さなり、 決成を計るここその爲に現在の常任理事 け全國資生同盟糾織結成を提唱し全國的 東京眞生會より全國各地の眞生會へ向 具體案

東京芝増上寺黑本尊堂において開きま る件 新年別時念佛三昧會開催に關す

りの方夜具共三十錢歸宅の方は十五錢、 用自辨のここ、C一食十錢位) 會費はお泊 後九時まで、御食事は辨當屋より取り費 壹月四日より三日間、午前四時より午

ました、皆樣の奮つての御活動を希望致 もつて募集し各班を結成するここに決め を徹底せしむる為に新會員四名を責任を 現會は未組織の大衆を組織し眞生主義 眞生會各班を設立の件 可決

意義深かき會合な終りました。

さに決定致しました。

經費不足の場合は會より補助支出するこ

東京真生會員のみならず全國の會員の 行するの件 會員擴張の爲パンフレツトを發 可決

> るでせう。 御手元に参り世の光さもなり指針さもな ました、このパンフットはやがて皆様の 起草者は土屋上人にお願するこさに致し にして出すことは刻下の急務さ存じます 塾 望して居る 真生の 意義 をパンフレット

東北地方の凶作に同情金を送る の件 可決

納入して戴くこさに致しました。 さして正月の御別時の際寄附國を作り、 を送つた方しわるか こ思ひますが眞生會 でもありませんすでに皆様のうち救済金 東北の兄弟の苦惱を救ふここは申すま

の進展を響い夜のふくるも知らず樂しい **たこもごも述べあひ來年度は一層の信仰** て送るこさに致します。 總會後は會員各自の入信の體驗を感想 集つたお金は社會局又は新聞社を通じ

四日間は中野氏の指導、 紅楓園に如法結衆をいたしました。 □眞生同盟佐屋支部 去る十一月十日より一週間、黑宮榛の 四日目の夕には 初め

> ます。 佛や座談が十一時、 れの色も見せず真剣さには、思はずお念 した、夜は農園の青年が集つて來て、 土屋先生が入來あつて一段で活氣つきま 十二時までもはずみ 疲

出て行かれる後姿を見ては誰も頭を上げ り分け、 る者はありまんでした。 女史が、歸りは淋しく一人で歩いて門を 骸なお送りした時は感慨無量でした。 鷲見榛等御迎へに來られ、自動車で亡き うでした、それでも翌朝は長源寺上人、 ら、諸準備に奔走するやらで、戰場のよ られ、夜一時、二時までも打電に走るや ずもがない せられた事で、道友の驚きや悲歎は言は が、突然腦溢血で倒れられ、その儘他界 斐から参加して來てゐられた松阪ゑい樣 一つ特筆すべき六日目の夕、岐阜の揖 來る時同道して來られし後職老 一夜な土屋先生も始ご通夜で 3

□眞生同盟津島支部

きな事質を與へられ、

な事實を爽へられ、尊い試練を頂きま今度は百の説法より、生きた一つの大

演で、 開會で、 で滿蒙問題の時局講演を開き、 でも寺以上の宗教的行事が出來るさいふ の本宅で念佛三昧會を致しました。在家 取つては兩家の御盡力は全く絕大なもの 行ひ、全く偉彩を極めました。我支部に 料理店の大廣間で念佛講演會な夕方まで つて實に愉快でした、廿日は「まの屋」 ざいました、 會の上にこんな感銘を與へた事も少うご いゝ範例であります、最後の晩ば公會堂 十一月十七日より三日間、 談笑の狸に眞面目な宗教改革論が賑 滿堂水を打つたような清聽で、 行基寺山田上人、土屋先生の講 後の座談がでも仲々散會せ 鍵清吳服店 中野氏の 盛

□真生同盟名古屋支部

會員諸氏も來會二晩の座談會は近來にな つてゐる。裁縫塾や、共生會、 **を御迎へするこさを得て、日頃足遠うの** く連絡がされて此頃はだん~~効果が上 讚仰會など傍系の若い人々の集りこも旨 い喜びでした。當道場崇德寺で同じく行 廿一日の例會日を恰度土屋先生 徹定上人

つて行くのがうれしいここです。

□真生同盟大阪支部

行くさの事である。 講演の方も主さして組織的方面に進んで 方専修念佛の期會な多くするこ同時に、 は敬行の二門を統一するこ云ふので、一 始るこ云ふので、道友一同は馬力をかけ て、その活動を待つでゐる。殊に之から 大阪支部では愈今春から盟主の活動が

□和歌山方面

である。 たので、 二ケ所に昨年から真生會が開かれたが、 んでゐる。一度しつくりした念佛の集り 井常次郎氏が力を添へて頂くこさになつ やうさしてゐる。殊に今度前京大講師中 道友の新しいだけ、非常な活氣で發展し **たしたいこの議も目下望まれてゐる吹第** 此の方面は和歌山市と同縣黑江町との 彼の地方の道友は非常に之を喜

本年は多事な み置き願上候

吾 9

□越後柏崎 渡邊八右工門標より

> 僕哉尊重なる御 身體 何 卒御大切に願上 察上候其後御上人様には御健康如何被渡 一九三一年も餘日なく御繁多の御事さ

忘年會た開き來る年の活動を協議可致候 は御上人の御都合出來候はば短時日にて 間の御豫定を以て當地へ御傳導願度今よ ん事明年二月十五日より五日間又は一週 深く心に期す所有之候何卒御指導賜ら も出來棄候へしが明年こそ さ會員一同 我柏崎光明眞生會も來る二十一日總會及 も宜敷故一ヶ月置き位に二日程にても時 り御都合被下標御顧申上候然して明年度 々御來越願度一般の希望に有之候間御含 し為め遺憾ながら發展

て之れを普及するかに有之候其第一歩さ 義より外なきご確信致します具如何にし 申す迄もなく現代思潮の羅針盤は眞生主 の宗教欄に先月は人生と宗教今月は宗教 ました又柏崎日々新聞等も我真生會には **ご戦争ご各一週間に渉り真生を轉載致し** して越後の天地に最も懽威ある北越新報 敬意を表し居候私も各方面に向へ活路を

朋 便

口神戶 過日東極樂寺方丈様で相談いたしました 二伸原稿用紙も百三四十枚こなり何れ近 御尊體御自重あらんごこを望むものに候 四五册用紙御惠送の程幾重にも奉阿候 日中發送さして頂きます何卒後二日分の 共に化他の一分にせんさ希ふ貴上人幸に の全観のあふるゝ御言な拜し以て白重さ 悪を増す維摩の言説私は時を得て貴上人 の發芽只念佛にあるを知る多聞を以て智 の希望念佛する處に無盡の暗を破る本心 せしめんの語を賜らんとな本心の愛本心 鶴田昌造機より

心申上候も何時與いる哉も不計御注意奉 邪間致し御上人御壯健の様子を承り御安 頃愚息休業にて皈寺去る四日の集りに御 人様には御病狀いかゞ候哉案じ申上候此 ひ御健勝の由大慶に存上ます、其後御上 俄に寒氣甚しくなりました、 □岐阜縣城山 行基寺様より 御一家御揃

> □愛知縣津島町。高木齋二様より ゼ申上候 祈候本月廿日直に名古屋の方へ來るつ

常に喜んで居ます。 快さの事真に慶賀に堪へません より、一層働いて益々健康である事な非 私こさ日夜勉强致し居り、 御手紙拜讀致しました、御病氣殆ご御全 私の暗黒な

かくして經濟中心より、信仰中心さなり お念佛をいたないて寝る様に成ました。 人で必ず。 は母が信仰に入つた事です、私の歸り 最近喜ぶべき事が亦加はりました。 いよく一家は慈光裡の人でなりまし いくら遅くなっても髪ずに待って属て一 F

願はくば御上人お體を御自愛下さい。 家多事實に身の緊張を覺えます。 日支動亂內閣辭職不景氣金再禁等益々國 進なる覺悟であります何卒御ペンケツあ 一騎常千の士がありますから共に協力精 岩下祥覽君、小熊啓太郎君を始めさして 念であります然し晋が同士に會田柾君、 開かんご考慮致しますが力及ばす甚だ殘

真生誌に御發表願度候 年始の辭お遠慮致します御差支へなくば 今年は亡母の喪中であります、爲め年末

]岐阜縣高須 圓心寺様より

の愛を垂れ給ひ吾を向上の直路へこ出立 今尙ほ忘るゝの閑無之候實に希くは無限 重雲ル開切すの好用、誠に心底に徹して 出でて百岩か破るの姿勢一句の言説私の 全郷の響である堰止められたる水、一度 でありました貴上人の一言一句其儘宇宙 方便の物は此體の有る中無盡の法を演べ んさの御決心不言の只涙が以て聞くのみ を省すさ先日上人が佐渡にて御**説法の砌** 申上率尼世尊は死の間際まで法を説て病 さも法は實在する此體は法を示すの善切 り其事の目前なるを感し申候此體はなく 候寒氣日増しに加るの時御病體を御案し 昨今の御病狀如何に候や真に御案し申上

き度存じよすが御都合相願いませうか至中心 (可能的) の御別時を勤修させて頂

急御高意御示漏相願い申上げます。

間東極樂寺で貴上人御指導のもごに青年

のですが、來年一月二十三、四、五ミ三日

150

賀

全國眞生同盟道友一同

價定誌本

年 部

金 穴 十

錢錢

同郵税共

一ケ年

金

_

同

謹 賀 新 IE.

左機悪からず御了承下さい。

同土 屋 美觀

小生等都合に依り今年は是の外に別に賀狀を出しません 和道

喪中 付年賀ヲ欽禮仕候 柏新 崎潟 バ 同とせ、渡邊八右工門

誌代拂込者並寄贈者御芳名

原元一樣、 諦信 様、 ○意圓宛 法蓮寺樣、 村田彌右工門樣、村田雙藏樣、 七耶治樣、 △福岡・高野イチ様、 △上諏訪 東京 △津島 ○参圓宛 岐阜 小林かほる様、 〇五圓宛 東京 阿部五藤様、 副島愼夫樣、 加廠游輔樣 △尼崎 友田音□郎様、△愛知 宮川鐵次郎様、△三重 稻村久子樣 石川清吉様、 〇貮側宛 ○演拾週 △高崎 三橋博子樣、 愛知 安西承信様、△佐世保 川添 名古屋 △岐阜 △大阪 △和歌山 伊藤留吉樣。 古賀清一郎樣、 大山政子樣、 法董寺様、△三重 八鳥 △柏崎 服部トモ様、 古賀博樣、 △和歌山 芝

> 注意の文注 昭和七年 一 月十二日發 一 行昭和六年十二月廿六日印刷納本 图送金は振替によるのが 便利 ●誌代は總で前金御拂込の事 ●講護希望者は代金を添へて です。 御申込下さい。

東京市芝區芝公園十四號地九番 編發 輯行 人兼

東京市外澁谷町中通二ノ四二 島馍 夫

±:

屋 觐

道

東京市外滩谷町中通二ノ四二 印刷所 電話青山七光二番

東京市芝區芝公園十四號地九番

發行所 振替口座東京四七二八八番 並

(大正十四年八月十三日) 昭和七年 一 月十二日發 行昭和六年十二月廿六日印刷納本 (毎月一回十二日發行) 第十 一卷第一號

昭和

三月

十 日印削的本

ille